

## 落語の身体論 (2) 『雪の瀬川』、あるいは永遠と刹那について

### Somatics for Rakugo(2) “Yuki no Segawa” or perpetuity and moment of Rakugo

小林昌廣

KOBAYASHI masahiro

#### 1. 雪の瀬川、雪と瀬川

地唄舞における見えない雪、歌舞伎劇における降り積もる雪。どちらの雪も、現実の雪のイメージとは異なった、独特の世界観を垣間見せてくれる。だが、落語は語り物だ、雪の冷たさや儚さや白さをことばのみによって表現しなくてはならない。そして、現在の噺家のなかで、その雪の描写がもっとも巧みな演者が柳家さん喬であり、今のところ彼しか演じないのが『雪の瀬川』なのである。あらすじは次のようなものである。なお『増補落語事典 改訂新版』では「傾城瀬川」の演目で載せられている。

下総屋の若旦那善次郎が堅物で、ひまがあれば読書ばかりしているので、下総古河にいる父親の善兵衛が心配して、番頭の久兵衛に遊びを覚えさせるようにと金を送った。久兵衛は浅草に若旦那を連れ出したが、とても遊ぶところではないので、幫間の華山に頼む。華山は学者というふれこみで若旦那に会い、いきなり連れ出さずに活け花を習うことから順に教えてうまく若旦那を吉原に連れ出す。五蝶という幫間と組んで松葉屋瀬川という当代随一のおいらんをあてがう。この薬がききすぎて、善次郎は遊びに夢中になり、八百両も使ってとうとう勘当される。善次郎はもと店で働いていた忠蔵という、いまは屑屋をやっている男の世話になっていたが、瀬川のことが忘れられず、忠蔵に五蝶のところへ手紙を届けてもらう。瀬川も善次郎のことが忘れられず、病いにふせていたところなので、五蝶から善次郎が生きるときくと大喜び、雪の日の夜、忠蔵の家へ駕籠で瀬川が善次郎をたずね、久しぶりの対面に泣く。その後善次郎は勘当が解け、瀬川を身請けして夫婦になった。

(東大落語会編『増補落語事典 改訂新版』青蛙房、1994)

この噺で雪が登場するのは最後の部分のみである。勘当された善次郎と瀬川花魁は離ればなれになってしまい、善次郎が届けさせた手紙を読んだ瀬川は、善次郎に「雨の日に会いに行く」といった内容の返事を送る。「雨の日に会いに行く」と、瀬川が善次郎に手紙で伝えたとき、喜んだのは善次郎ばかりではないだろうし、不安でいっぱいになったのは、善次郎の世話をしていたかつての使用人の忠蔵ばかりでもなかっただろう。観客は雨のなか、なんとしてでも瀬川に足抜けをしてほしいと希望しつつ、忠蔵のように足抜けをしたあとの運命を憂えることになる。忠蔵の憂いとは、廓に連れ戻された瀬川の運命だけではない。よしんば廓を見事に抜けおせたとしても、思いつめたこの若い二人の行く先はこの世にはない。つ

まり忠蔵は二人が心中をするのではないかと危惧しているのである。「雨の日に会いに行く」という瀬川の決意、そしてそれを受け入れる善次郎の気性、さらにそんな二人を離れさせない、死なせないために命を賭して守ろうとする忠蔵の心意気、この三つ巴の「思い」を交差させる最大の装置が雪なのである。

その場面を柳家さん喬の『雪の瀬川』から引用してみよう（以下の引用は同名の CD から文字おこしたものの。2007 年 1 月 28 日「第 94 回さん喬を聴く会」での収録である。）。恵みの雨がなかなか降らずに、突然雪の朝となる。「ハラハラと降り出した雪はドンドンドンと降り続きます。夜の帳が下りる頃には、江戸を真っ白に包み上げます」。雪が夜よりも先に江戸の町を覆いつくす。それを「包み上げます」という柔らかな表現であらわしている。江戸の町全体を真っ白に埋めつくす描写を加えたのは、善次郎（さん喬版では鶴次郎となっている）と忠蔵のいる長屋ばかりでなく、吉原の松葉屋とて同じように雪で白く彩られていることを表現したかったからだろう。あとは瀬川は鶴次郎のもとへ来ればいい。余計な説明も、忠蔵や観客たちの心配も、みなこの雪が覆い隠してくれるはずだ。瀬川を待ちこがれ、半ば興奮状態にある鶴次郎を忠蔵は諭す。そして夜半、鶴次郎は二階で、忠蔵は一階で知らぬあいだに眠りに就く。

外は雪がしんと降り続きます。鶴次郎と忠蔵の肩に、雪がやさしく包まれてしんと静まりかえっております。

サク、サク、サク、サク、サク。

（戸を叩く音）（小声で）「忠蔵さん」

（もう一度戸を叩く音）「忠蔵さんのお宅はこちらでござんすか」

（さらに戸を叩く音）「忠蔵さん」

（寝ぼけ声で）「はい、ただいま。へい、ただいま開けます。

凍てつく戸をガサッ、ガサッ、ガサガサガサッと開けますと、雪がふわーっと土間へ舞い込んでまいります。暗闇のなかを一挺の駕籠がまるで逃げるようにザクッザクッ、ザクザクザクザク、ザッザッザッ…。雪は追いかけるように駕籠のあとをフワーっと舞い込んだ。

「へい、お待たせをいたしました。どちらさまでございますか」

ひょっと目の前を見ますと、黒い頭巾を被りまして目だけ開いて引きずるような合羽を着まして大小をたばさんだ一人の侍がものをも云わずにつかつかつかつ、中へ入ってきた。

（忠蔵驚いて）「あっ、お通りくださいませ。手前どもはご覧の通りの屑屋風情でございます。金目のものなぞはございません。どうぞ、どうぞお通りくださいませ。」大小を鞘ごとスーッと抜きますとそこへポンと置いて、合羽の襟元をビリッ、ビリビリッとはがすようにとります。合羽をポンと脱ぎ去ります。燃えるような緋縮緬の長襦袢です。博多献上、紫の伊達巻をきりきりっとしまして胸元にぐっとさしこむ。頭巾をすばっととりますと、黒い髪がばさっ。雪のように抜けるような白い肌、目の前にすっと立つは、まるで雪女郎でも舞い降りたかというような美しい姿。

「……。瀬川、花魁でございますか」

鶴次郎は瀬川のところに飛んで出てくる。詫びをいいあう二人。鶴次郎は何度も花魁に「寒くないか」と尋ねる。

雪はまるで虫が止まるようにフーッと降ってまいります。

瀬川の背中にボンととまると、スッと溶けてゆきます。

戸口からヒューと吹き込む雪は、まるでふたりを包みこむように、どんどんどんどんと降り積もってまいります。

雪は、さらにさらに降り続きます。

忠蔵は、瀬川に搔卷をかけてやろうとそばにスッと立ちすくみましたが、そのふたりの嬉しそうな顔に、ただただ搔卷をもって立ちすくんでおります。

雪は、さらにさらに降り続きます。

江戸中の雪が溶ける頃に、ふたりは晴れて夫婦になることを許されます。

昔、むかしのお話でございます。

(このあと、ウケで地唄『雪』)

引用が少々長くなったが、さん喬が多様な擬態語を用いて場面を構成していることがよくわかるであろう。しんしんと降る雪の下でふたりは再会し、その雪が溶ける頃、ふたりは夫婦になる。たったそれだけのドラマを、さん喬はじつに緻密に構造化しているのだ。

## 2. 『雪の瀬川』の出自～『煙草屋喜八』

ところで、この『雪の瀬川』は複雑な出自をもつ。『増補落語事典 改訂新版』では「雪の瀬川」という項目はなく、「夢の瀬川」と「傾城瀬川」というふたつの関連項目が掲載されている。『夢の瀬川』は別名『橋場の雪』あるいは『夢の愀気』または『雪の瀬川』と書かれているので、てっきりこちらがいま話題にしている『雪の瀬川』かと思いきや、あらすじを読んでもみると、なるほど瀬川という花魁は出てくるが純愛物でもなんでもなく、のちに『夢の酒』という演目（上方では『夢の愀気』）で口演されることになる滑稽噺である。三代目柳家小さんの速記が『橋場の雪』という演目で残されている（『口演速記明治大正落語集成』第四巻）。

もうひとつの『傾城瀬川』、別名『喜八たばこ』あるいは『たばこ屋喜八』こそが目指す『雪の瀬川』である。圓生自身の解説に耳を傾けよう。

これは、大岡政談の内、「たばこ屋喜八」という噺がございますが、これを春錦亭柳桜が「百花園」の中に速記を残しております。これを読んで、浅草の説明をして行くところなどが面白いと思って、演りはじめました。「たばこ屋喜八」の方は、筋も複雑ですし、花魁の名前が玉照となっています。善次郎に逢いに来るところもありますが、別に柳派で演っていた「傾城瀬川」という噺がありまして、やはり、「たばこ屋喜八」から出て独立したものでしょうが、前半のところがなく、若旦那が勘当されたあとだけなんです、それらを一緒にして、あたくしが手を入れて、まとめました。  
(『圓生全集』別巻中、青蛙房、1968)

そしてこの解説で圓生は重要なことを云っている。

初演の時には、善次郎に花魁が逢いに来る時に、雨が降るようにして演りましたが、初代圓右師は「雪の瀬川」として演っておりまして。どうも雨よりも雪の方が情緒があるんじゃないかと思います。雪の中で、黒縮緬の頭巾で花魁が立っているというのが、絵になると思いまして、雪に変えて演っております。(全書)

この噺に雪を降らせたのは圓生であった。

圓生は『たばこ屋喜八』という先行作品が「浅草の説明をして行くところなどが面白いと思って、演りはじめました」と述べており、この『雪の瀬川』のオリジナルとして確定している。『増補落語事典 改訂新版』でも『傾城瀬川』の解説の部分に「大岡政談のうち『たばこ屋喜八』という長い人情ばなしから独立してできたはなし」とある。実際に東洋文庫の『大岡政談 2』（辻達也編、平凡社、1984）を繙いてみると、「煙草屋喜八之記」とある。辻達也の解説によれば、この話はすでに嘉永年間（1844-1853）には成立しており、云うまでもなく「大岡政談」は、講談として巷に流布し、あるいは舞台化され、あるいは落語化され、最終的にはテレビ化されるという経緯をもった、いわば長寿番組なのである。むろん、実在の大岡忠相の行状とは無関係に、その情に厚いお裁きだけが一人歩きをして、身分制度が明確であった江戸時代の人心を平かにして、情という身分を超えた産物が人間の心をつなぎとめることを芝居や口演によって明らかにしたわけである。「煙草屋喜八」はそんな大岡政談のエピソードにおいてもしばしば言及される話である。

さてこの「煙草屋喜八」であるが、基本的な設定は（登場人物の名称は異なっているが）『雪の瀬川』（『松葉屋瀬川』）と変わらない。大家の若旦那が堅物なため、人を介して吉原に誘うと、一人の花魁に夢中になり、大金を使い果たし家からは勘当され、いったんは死を決意するが、元使用人夫婦の世話によって身を取りなおすが、やがて若旦那のあとを追ってきた花魁と夫婦となって結ばれる、というあらすじである。ただし「煙草屋喜八」の場合は、その題名からして違っており、若旦那（吉之助）と花魁（初瀬留）の悲恋と成後は物語の後景に退き、もっぱら吉之助を預かっていた煙草屋の喜八とお梅夫婦の命を賭した主人思いの行為が大岡越前守によって天晴れ賞賛されるという形になっている。そしてそこに幾つかのエピソードを重ねることによって、多層的な物語としての「煙草屋喜八」ができあがっている。たとえば、若旦那の吉之助の世話をするためには先立つものがないために、喜八の妻お梅は与力の笠原桑之進のもとへ奉公に出るが、笠原の度重なる懸想に辟易としている件り。あるいは、妻を奉公に出してしまった喜八はほんの出来心で質屋に忍び込み盗人を働こうとするが、たまたま質屋で出くわした大盗賊の田子の伊兵衛と出くわし、事情を知った伊兵衛が自分の盗んだ八十両を渡し、質屋に火をつけ夜の街に消えてゆくが、逃遅れた喜八が火附盗賊改めに逮捕されてしまう件り。そして「雪の瀬川」では最大のクライマックスになっていたふたり（吉之助と初瀬留）の再会があっさりと描かれ、逮捕された喜八を救うために家主平兵衛の取り計らいによってお梅が大岡忠相に駆け込み訴えをする件り。そして事情を知った田子の伊兵衛が自首し、お梅に執心していた桑之進は部下の七助の証言によって有罪となり、見事な大岡裁きで大団円となるのである。

### 3. 『雪の瀬川』 熟考〜雪のイメージ

六代目圓生によって蘇った『松葉屋瀬川』（『雪の瀬川』）は、大岡裁きの最大の主題である「人々の誠実さ」をベースにしつつも、若旦那と花魁との純愛の物語として圧縮しつつも、色街の吉原の情緒をふんだんに見せながら、降る雪のなかを男逢いたさに足抜けしてやってくる瀬川花魁の姿を圧倒的な存在感で描写した屈指の人情噺となっているのである。花魁や傾城の登場する落語は数多いが、この『雪の瀬川』のように、若い男がふとしたことから今をときめく太夫格の女郎に出逢い、惚れ込み、寝食を忘れて恋い焦がれ、男の真実と遊女の慈愛によって晴れて夫婦になる、という筋をもった噺には『紺屋高尾』『幾代餅』『搗屋無間』がある。これら三演目はどれも似た構成をしているが、『雪の瀬川』と決定的に異なった点は、花魁との格のちがいが歴然としているというところである。完全な身分制度のひかれていた江戸時代において、遊女と客とのあいだに存在していた「見えない階級」がこれらの人情噺のモチーフとなっている。紺屋の職人久蔵、米屋の奉公人清蔵、そして米搗き屋の職人徳兵衛が、それぞれちょっとしたきっかけで最高位の花魁（高尾太夫、幾代太夫、宵山太夫）の名と姿を知る。そして店の主人をはじめとして周囲の者の協力によって懸命に働き貯金をした男たちは、奇跡的に目指す花魁と一夜を明かすことが叶う。しかし、自分たちの身分ではもう一度花魁のもとを来訪することなど不可能である。そのことを花魁に告げる。そこで花魁は男の純情に触れ、廓に足しげくやってくる手合いの人間でないことを確信する。やがて花魁は世俗の姿となって男の職場を訪れ晴れて夫婦となり商売を始め繁盛する。『雪の瀬川』とはいささか異なった世界なのである。

だが、『雪の瀬川』の善次郎も、最初は大店の若旦那であるから金には困っていないし、いつでも瀬川花魁に逢うこともできるだろう。やがて勘当となった善次郎は、前述の三演目の男たち同様の、超えることのできない階級差の下で、花魁を想い続けることしかできなくなる。そして、これらの噺すべてに共通しているのは、花魁が男に惚れている、という事実である。「傾城の恋はまことの恋ならで金もってこいが本当のこいなり」とか「傾城に誠なし」と云われた傾城は、たしかに『三枚起請』でも『五人廻し』でも『お見立て』でも『品川心中』でも、客を男と見ることのない、じつに職業熱心な女郎として落語のなかに多く登場する。そうした一面滑稽にすら映る傾城と客のありさまが、『雪の瀬川』とその近縁演目においては、純化されドラマ化されてゆく。傾城が男の真実に触れ、惚れてしまう。女郎という職業においては禁じられている恋愛、しかも純愛を彼女たちは自分のからだのなかに静かに発生させるのである。その純愛がしだいに募ってゆくからこそ、女たちは恋しい男のもとへと走るのだ。傾城のもつ気高さと慈愛とをもって、ゆっくりと落ち着いて男のもとへと急ぐのである。『雪の瀬川』だけは足抜けという、遊廓における最大の罪を犯して善次郎のところへ急ぐ。他の太夫たちは、年季が明けて晴れて自由の身になってから男たちの働く場所へと向かう。「雨の日に会いに行く」という瀬川花魁からの手紙の決意を知った善次郎は、ただ待つしかない、雨が降る日を。そして、雨でなく雪となった日に瀬川の決意は現実のものとなる。このドラマチックな構成と息をもつかせぬ展開は、他の三演目と異なって、その結末を容易に想像させることを抑圧する。この「奇跡の雪」は、必ずしも「恵みの雪」ではないのかもしれない。歌舞伎劇の『三千歳直侍』や『新口村』のように、男と女を永遠に別れさせる「非情の雪」であるかもしれないのだ。年季が明けた傾城が新妻の出立ちで男のもとを訪れるまで、男たちは慌ただしく、そしてだらしなく待つしかない。落語では、そのと

きの男たちの無様な慌てぶりを滑稽に描きだす。人情噺でありながら、そこに緊張の緩和たるべく笑いが準備されている。たしかに雨を待ち、雪になってからは夜半過ぎを待つ善次郎の態度は滑稽であり、ここも笑いどころにはちがいのなかろうが、観客は果たして瀬川花魁がやってくるのかどうかを固唾をのんで待ち構えているのである。久蔵や清蔵や徳兵衛の滑稽さは、あくまでも落語という構造のなかの滑稽さであり、その外側にいる観客は安心して笑うことができるだろう。けれども、『雪の瀬川』では違う。ことにさん喬口演の『雪の瀬川』では、多様な擬態語の使用としつとりとした語り口とによって臨場感と緊張感是否応なしに高揚し、「緊張の緩和」までの時間が永遠かとも思えるほど長く感じられ、だがやがて緩やかな地点へと観客の意識は導かれていく。さん喬独特のクスグリは随所に置かれているが、やはり『雪の瀬川』は笑いをとる落語ではない。

多くの落語同様に、悪人は登場せず、悲劇的な結末も避けられる。その安定感のうえに成立している芸能であるはずなのに、『雪の瀬川』には、積もった雪で覆われた地面に最初に足を踏み出す不安が伴う。その不安とは、物語がもつ構造に対する不安というよりも、物語の終盤で語られた「雪」ということばの持つ複数のイメージの連なりが、まるで積もった雪そのものであるかのように錯覚されて、観客がどこかで連れ去られてしまうのではないか、という不安である。物語から感じられる文学的（修辭的）不安ではなく、むしろ「こんな噺を聴いてしまった」という思いも加わった実存的な不安。雪はふたりを再会させ、永遠の彼方へとふたりを誘う存在であった。だからといって、心中が選ばれたわけではなく、再度の別れが生じたわけではない。幸福といえどこんなに幸福な結末もふたりの行く末もないのだが、雪のもつ多層的なイメージの強さと重さゆえに、「永遠と刹那」は一枚の絵画となって雪が吹き込む忠蔵宅の居間でしっかりと抱き合う善次郎と瀬川花魁の姿を描き出す。それを夫婦となったふたりが懐かしそうに、愛おしそうに眺めている。観客はどこにもいない。あの日吹き込んだ雪の粒子のように、ふたりの愛によって観客も溶けてしまったのだ。圓生は絵画的な世界を言語に変換することにおいては随一の噺家だ。そしてさん喬は、言語的な世界を絵画的な空間へと描写することにおいてもっともすぐれた噺家だ。そこで重要なことは、演目が、絵画なり言語なりで十分に表象可能なモチーフでなければならないということだ。『雪の瀬川』は講談や大岡裁きといった出自をもつがゆえに、言語的作品であることは言うまでもない。また、圓生が工夫し、さん喬によって完全視覚化（もちろんイメージ化という意味で）されたことで、この噺の最大のアイコンである「雪」は漢字でもなく音でもなく、まさに雪そのものの様態をもって、高座全体を包みこんでくれるのだ。そして、噺の最後に圓生が「相当な仲人を立てて善次郎と瀬川がめでたく夫婦になったという。『傾城に誠あり』。『松葉屋瀬川』でございます」と結び、さん喬は「江戸中の雪が溶ける頃に、ふたりは晴れて夫婦になることを許されます。昔、むかしのお話でございます」とサゲる。圓生は瀬川花魁に重きをもたせ、さん喬は雪に焦点を合わせる。それがふたりの演者の演目のちがいになっているのかもしれないが、いずれにせよ、瀬川もその日の雪も、もはやどこにも残っていないのである。だが、瀬川花魁と雪とをつなぐ「永遠と刹那」のイメージがどこまでも、そしていつまでも観客の心のなかに残りつづける。

『雪の瀬川』が多くの演者によって演じられない理由がここにある。

それは、通常の落語、いつもの人情噺とちがって、本当の結末というものが真っ白な雪によって永遠の彼方へと運び去られてしまったからなのだ。

観客は、ただただ佇むしかない。

つまりは、寄席に向かないネタなのである。